平成23年度　社会システム研究科　学位(修士）請求論文（要旨）

看護学生のコミュニケーションに関する研究
臨地実習における報告行動に影響する要因について

地域コミュニティ専攻
学籍番号 2010M30009　吉田 理恵

要旨

1. 本研究の問題意識と目的

看護基礎教育において、コミュニケーション能力を高めることが、課題とされている。看護学生が実際のコミュニケーション能力を身につける機会として、臨地実習がある。この臨地実習では、一人の患者を受け持ち、学生が可能とされる看護ケアを指導看護師の指導のもとに実践する。医療現場のコミュニケーションの特徴として「報告」があげられる。看護学生と指導看護師間も「報告」によって情報の伝達が行われる。なぜ看護学生がうまく報告できないのか、看護師と看護学生の報告の違いや看護学生が体験する報告行動について考察することで、①看護師と看護学生の「報告」に関するメンタルモデルの違い、②コミュニケーションとしての報告スキルの不足、③対人関係の影響、の3つの要因が予測される。

本研究では、看護学生が臨地実習で実際に体験した看護師に対する報告行動の実態を調査することで、看護学生が行う報告というコミュニケーションの特徴を明らかにする。また報告行動に影響する要因を示すことで、看護学生に必要なコミュニケーションに関する教育内容を検討する。

2. 本研究の構成および要約

1）研究方法

報告行動に関する質問調査紙を作成し、看護学校 3 年課程の 3 年生 69 名を対象に、質問紙による調査を実施した。分析方法：因子分析（重みなし最少二乗法、プロマックス回転）とクラスタ分析（平方ユークリッド、平均連結、因子分析の4つの因子得点を平均が 50、標準偏差 10 となるよう標準化した。）

2）結果

①報告行動の実態について：患者の病状やバイタルサイン測定の結果については、すべての学生が必要に応じて報告をしていると回答した。しかし、患者の状況やニードについて、あまり報告できていないと回答した学生は約2割、自分の考えを伝えることができないと回答した学生は約 4 割に達していることが明らかとなった。また、必要時に自分の要望を看護師に伝えることができると回答した学生は 9 割を超えているのに対し、看護師の指示（アドバイス）の意味が分からなかったときに質問することができると回答した学生は4割程度であった。

②報告行動に関する因子分析：17項目に対して、報告行動に影響する4因子を導き出した。第1因子は、「専門用語の活用」「敬語の使用」などで構成され、『基本的報告行動』と名づけ、第2因子は、『緊張』、第3因子は、「自分の考えを伝える」「ｱﾄﾞﾊﾞｲｽが分からなかった際に質問する」などで構成されており、『能動的な報告行動』とした。第4因子は、「質問の意味が分からない」「アドバイスの意味が分からない」で構成されており『理解不足』とした。

③看護学生のクラスタ分析：クラスタ分析の基となる因子分析の4つの因子のそれぞれの特徴を考慮し、次の4つのグループに分類した。Ⅰグループ『学生なりの報告ができていると自己評価しているグループ』2グループ

『報告行動に関する自己評価が低く、緊張を強く感じるグループ』Ⅲグループ『看護師の報告メンタルモデルと自分の報告行動にズレを感じているグループ』Ⅳグループ『看護師に近い報告メンタルモデルを持つグループ』である。

④質問調査紙の自由記述の分析

報告を困難にしている要因として、指導者側の要因(専門用語の使用や忙しさ、看護師の持つ雰囲気)と学生側の要因(緊張や不安、学習不足、忙しい看護師への遠慮)に整理される。

3)考察

今回の実態調査では、看護学生は必要に応じて患者の病状やバイタルサイン測定の結果を指導看護師に報告できていると回答していたが、この報告内容だけでは、看護師が必要としている情報が不足していることも看護師からの質問内容から示された。必要な情報を得るために、指導看護師は看護学生にいくつかの質問をしているが、この質問を負担に感じ、自分の報告が伝わっていないとネガティブに捉えている学生がいることも分かった。因子分析結果の第3因子(能動的報告行動)に含まれる「患者の状況」「自分の考え」といった患者のニードや学生自身の考えを看護師は報告時に求めていることが予測される。指導側は、報告時に何を報告すべきか、看護学生に明確に示す必要がある。

第1因子(基本的報告行動)に含まれる「専門用語の活用」は、言葉に関した知識を示す。医療用語の言葉の意味がわからない場合は、コミュニケーションとしての報告行動に影響するため、医療者は、学生のレディネスを把握するとともに、学生は、言語として使用される専門用語を学習する必要性がある。

クラスタ分析から得られたグループの特徴から、看護学生が「報告行動」ができるようになるまでの過程について予測した。学生としての基本的な報告行動は、コミュニケーションとしては、一方的な伝達であるかもしれないが、この報告行動ができるようになるまでにもひとつの過程がある。このスキルを獲得していく過程で学生は基本的報告行動に対して「できる」という評価が高くなると考える。しかし、緊張が強く「あまりできていない」と自信のなさを示すグループがあることも明らかになった。

実習経験を重ねることで、学生が行っている報告と看護師が求める報告に違いがあることに気づき、自分の報告が十分でないと一旦自己評価が下がることも予測される。看護師の求める報告が実践できるようになると、さらに看護師に近い報告ができるようになっていくと考えられる。

看護学生が持つ報告メンタルモデルと指導看護師の持つ報告メンタルモデルには違いがあり、そのことで生じるさまざまな要因が看護学生の報告を困難にしていることが推測される。

本研究の意義と課題

本研究において、看護学生の臨地実習における報告行動に影響する要因について、いくつかの示唆を得た。報告行動に関する文献は少なく、看護学生の報告の実態を示したものも少ないため、今回、看護学生を通して得られた結果は、今後の臨床におけるコミュニケーションの参考になるものと考える。しかし、今回の調査は質問紙によるものであり、学生の実際の報告行動を示すものではない。また、対象校が1校であり、看護学生数も少ないため、一般化することはできない。

今後、研究対象を広げることで、さらに「報告」を困難にしている要因が明らかになると考える。また指導者からの調査を加えることは、教育方法を検討するうえで重要な示唆が得られるものと考える。